

● JWPA レポート ●

(社)日本木材保存協会規格 JWPAS-TS-(1) (2011) 土壌処理用防蟻剤等の性能基準及びその試験方法 の改正について

公益社団法人日本木材保存協会

本改正は、土壌処理用防蟻剤がより一層、非忌避性/遅効性薬剤に移りつつある中で、現行の試験方法では性能を的確に評価することが困難になっていることを受け、日本木材保存剤工業会からの要望により実施されたものです。改正原案は、

木材保存剤等審査事務局により策定され、当協会においては、それを受けて関連委員会ならびに理事会の議を経て2018年7月1日に改正試験法として決定しました。以下に改正試験法と解説を掲載します。

(公社) 日本木材保存協会規格 JWPAS-TS-(1) (2018) 土壌処理用防蟻剤等の性能基準及びその試験方法

1. 総則

1.1 適用範囲

この規格は、土壌処理用防蟻剤及び防蟻材料(以下、土壌処理用防蟻剤等とする)の性能基準及びイエシロアリによる防蟻効力試験方法について規定する。土壌処理防蟻剤等には、液状の薬剤だけでなく、粉状や粒状の薬剤や、薬剤が添加されたシート等の防蟻材料を含む。

1.2 土壌処理用防蟻剤等の防蟻効力試験は室内試験及び野外試験からなる。

1.3 土壌処理用防蟻剤等の室内防蟻効力は、耐候操作した処理土壌層及び無処理土壌層からなる試験区の穿孔距離、死虫率及びスギ辺材木片の質量減少率で表す。野外防蟻効力は、処理土壌面または防蟻材料面の上に設置した木材片の被害の有無で表す。

2. 性能基準

2.1 室内防蟻効力試験

試験区の穿孔距離、死虫率及びスギ辺材木片の質量減少率がすべての繰り返しにおいて下記いずれかの基準を満たしているときは、その土壌処理用防蟻剤は防蟻性能ありとする。

- ・ 処理試験区を未貫通の場合（穿孔距離が50mm未満の場合）
- ・ 処理試験区を貫通した場合、21日以内に死虫率が100%ならびにスギ辺材試験体の質量減少率が1%以下の場合

粒状の防蟻材料やシート状の防蟻材料においては、それが穿孔されない場合、防蟻性能ありとする。

無処理試験区では、すべての繰り返しにおいて開始後1日以内に貫通し、また、試験終了時のスギ辺材木片の平均質量減少率が10%以上でなければならない。

2.2 野外防蟻効力試験

試験開始2年間、処理土壌内に置かれた木材片に、いずれも食害が見られないときは、その土壌処理用防蟻剤等は、防蟻性能ありとする。

3. 試料

試験しようとする土壌処理用防蟻剤から、その品質を代表するように適当量を採取し、指定された希釈剤等を用いて、指定された濃度に調整したものを試料とする。ただし、原液の濃度で試験するものは、採取された原液を試料とする。

また、粒状の防蟻剤やシート状の防蟻材料等そのまま使用するものも、その品質を代表するように、適当量を採取して試料とし、その取り扱いはそれぞれの仕様に従うものとする。

4. 室内防蟻効力試験

4.1 試験土壌

4.1.1 無処理土壌

イエシロアリ生息地等から採取した砂壤土を、20メッシュでふるい分けしたものを、温度 60 ± 2 ℃で恒量になるまで乾燥し、無処理乾燥土壌とする。無処理乾燥土壌4部に水1部（質量比）を加え、混合したものを試験用の無処理土壌とする。

4.1.2 処理土壌

無処理乾燥土壌4部に試料1部を加え、十分に混合した後3週間室内に放置したものを処理土壌とする。粒状の防蟻剤やシート状の防蟻材料の場合はその仕様に従い処理する。

4.2 耐候操作

4.2.1 処理土壌を温度 40 ± 2 ℃の恒温器中に4週間放置する。その間1週間毎に、処理土壌の調製に用いた試料と同量の水を補給し、十分に混合する。粉体、粒状の防蟻剤、防蟻材料及びシート等は温度 40 ± 2 ℃の恒温器中に4週間放置する。

4.2.2 耐候操作を行った処理土壌は、処理土壌の調製に用いた試料と同量の水を加えた後十分に混合する。

4.3 試験容器

4.3.1 試験容器は、内径約50mm、高さ約120mmのガラス円筒2本を、底面から約20mmのところ、内径約15mm、長さ約100mmのガラス管（両端の擦りあわせ部分を除いた透明部の長さが約50mmで5mmおきに目盛りをつけたもの）で連結したものとする（図1）。

4.3.2 試験容器のガラス円筒の両方に無処理乾燥土壌50gずつを入れ、それぞれに水10gを加える。片方のガラス円筒の無処理土壌上に厚さ約1mmのプラスチック製の網を敷き、予め温度 60 ± 2 ℃で恒量になるまで乾燥し、0.01gのけたまで質量を秤量したスギ辺材木片（木口 $20 \times 20 \times$ 厚さ10mm）1個を木口面が上下になるように置く。

ガラス管の中央透明部（50mm長）に、20mm（処理土壌層）+30mm（無処理土壌層）の厚さで、4.2.2で調整した試験用処理土壌6g及び4.1.1で調整した試験用無処理土壌9gを両側から詰めて、50mmの処理試験区とする。ガラス管をスギ辺材木片が入っているガラス円筒に処理土壌側が位置

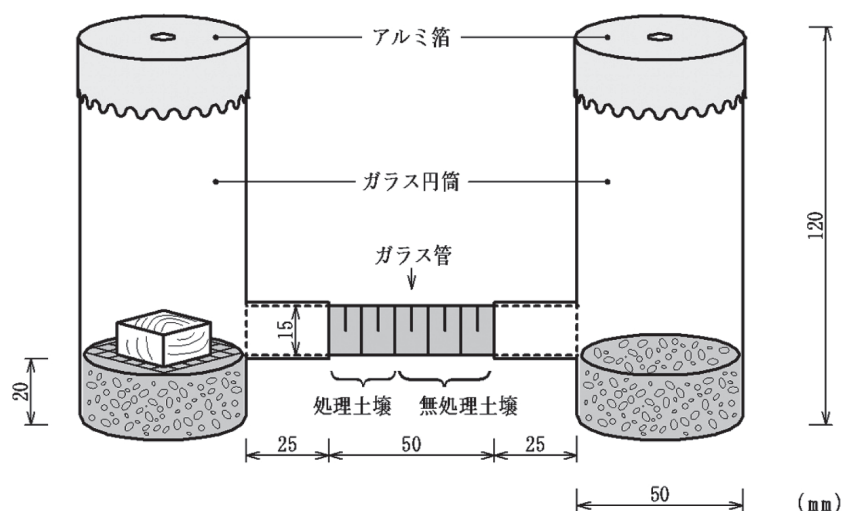


図1 室内試験容器

するように連結する。一方、ガラス管の中央透明部（50mm 長）に試験用無処理土壌15g を50mm の厚さで詰めたものを無処理試験区とする。

防蟻材料についてはその仕様に従い、ガラス管の中央に試料を設置し、左右を無処理土壌で固定する。

4.4 試験方法

4.4.1 無処理土壌側に連結したガラス円筒へ巣から取り出したイエシロアリ職蟻100頭、兵蟻10頭を投入する。試験容器を温度 $28 \pm 2^\circ\text{C}$ 、湿度70%以上の恒温室に21日間静置し、処理試験区及び無処理試験区でのシロアリの穿孔状況、行動状況、特に忌避性及び健康状態を観察する。

4.4.2 試験は、処理試験区及び無処理試験区につき各5回繰り返すものとする。

4.5 試験結果

4.5.1 試験終了後穿孔距離を測定し、生存シロアリ数を記録し、死虫率（%）を求める。無処理試験区の死虫率の平均は、小数点第1位を四捨五入して整数とする。

4.5.2 試験終了後、スギ辺材木片を洗浄し、温度 $60 \pm 2^\circ\text{C}$ で恒量になるまで乾燥し、0.01g のけ

たまで質量を秤量して、4.3.2で求めた試験前の乾燥質量との差を算出し、これを試験前の質量で除して質量減少率（%）を求める。なお、個々の木片の質量減少率は、小数点第2位を四捨五入して小数点1位まで求め、無処理試験区の平均については小数点第1位を四捨五入して整数とする。

4.5.3 投入したシロアリの全数が試験期間内に死滅したと判断される場合は、それに要した日数を記録する。また、試験期間内に処理試験区や防蟻材料を貫通した場合は、それに要した日数を記録する。

4.5.4 試験結果の表示

試験結果は、表1のように表示する。

5. 野外防蟻効力試験

5.1 試験地

試験地は、イエシロアリ生息地で、営巣が確認された野外とする。

5.2 試験方法

5.2.1 土壌処理

- (1) イエシロアリ生息地内に10点をマークし、ランダムに5点を処理土壌区、5点を無処

表1 試験結果

試験区番号		穿孔距離 (mm)	死虫率 (%)	質量減少率 (%)	備考
処理 試験区	1				
	2				
	3				
	4				
	5				
	平均				
無処理 試験区	1				
	2				
	3				
	4				
	5				
	平均				

死虫率：職蟻の死虫率（%）

穿孔距離：50mm を越えて貫通した場合は「貫通」と記載

備考：試験期間中、処理土壌への穿孔状況とシロアリの行動状況、特に忌避性及び健康状態を観察し、記録する。

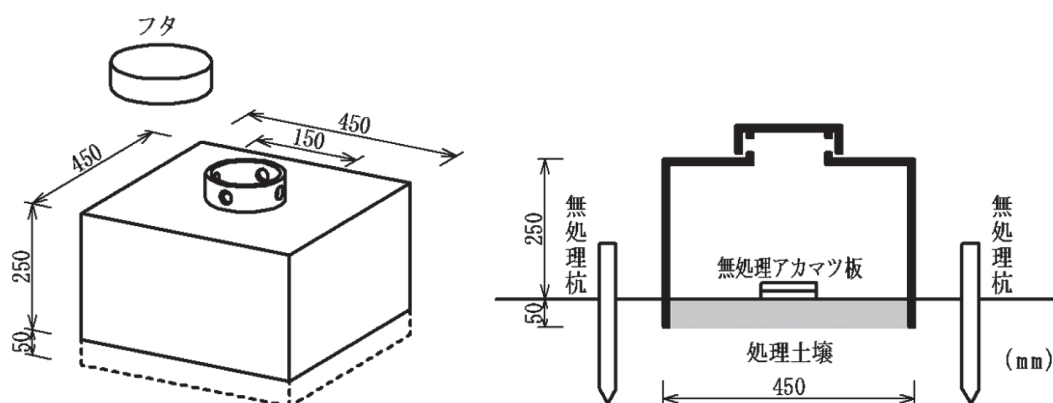


図2 箱形容器

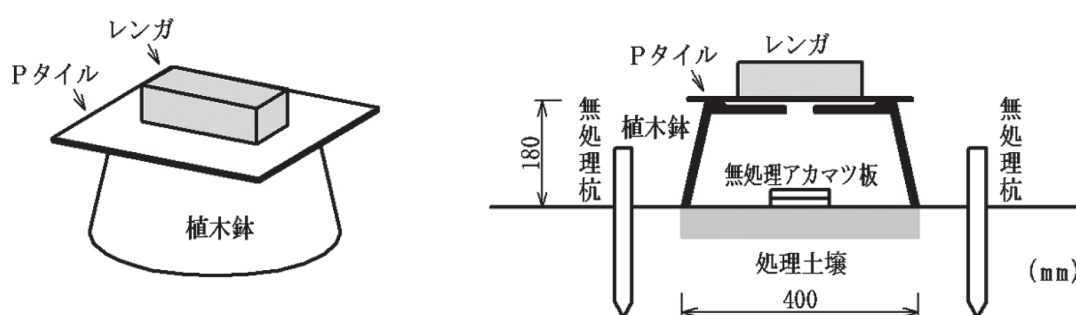


図3 植木鉢（13号平形素焼き）

理土壌区とする。各々の土壌区は1m以上離すものとする。試験地の雑草や落葉を除去し整地する。

- (2) 試験しようとする濃度の試料を3リットル/m²の割合で処理土壌区に均一に散布する。

粒状の防蟻剤や防蟻材料は、その仕様に従って土壌に処理する。

- (3) 処理及び無処理土壌の中央部に、健全なアカマツ辺材（100×100×厚さ10mm）を2枚重ねて置く。

5.2.2 容器等

窯業系ボードあるいは塩ビ樹脂板で構成された箱型容器（450×450×高さ300mm）またはこれに準ずる市販の容器、あるいは植木鉢（13号平型、素焼き）を用意する。箱型容器の上部表面には穴を開け、径約150mm、高さ約50mmの円筒をつけ、これよりやや大きい直径の上蓋をかぶせる。円筒と上蓋の間には適当な間隔をあけ、箱型容器内の過度の温度上昇を防ぐ（図2）。なお透水性材料

を用いた場合は表面を防水処理するものとし、接合部も防水材料でシールし、雨水等の侵入を防ぐ。植木鉢を使用した場合は、その上にPタイルとレンガを載せて雨水の侵入を防ぐ（図3）。

5.2.3 容器等の設置

処理土壌の上に容器等を設置し、箱型容器の場合は下部約50mmを土中に埋める。なお植木鉢の場合は土壌との間に隙間が無いようにする。さらに、容器の周囲に無処理杭2～4本を図2、3のように打ち込む。

5.2.4 試験期間

試験期間は2年間とする。1年経過毎に木材片の食害の有無を観察する。ただし、無処理土壌区の木材片や無処理杭が試験期間開始後1年以内に食害されないときは、試験場所を移動して試験をやり直す。

5.3 試験結果

処理土壌区内に設置した木材片の食害の有無を観察し、表2のように表示する。

表2 試験結果

土壌処理用防蟻剤名		組 成	
試料濃度	% (W/W)	希釈剤名	
主成分の散布量	g/m ²		
処理土壌区番号	木材片の被害の有無（あり，なし）		備 考
	1 年目	2 年目	
1			
2			
3			
4			
5			

備考：無処理土壌区の木材片や周囲に埋め込んだ無処理杭の食害状況のほか、試験期間中に観察された参考となる事項を記載する。

土壌処理用防蟻剤等の性能基準及びその試験方法の解説

1. 改正の背景と目的

1987年に制定された「土壌処理防蟻剤の防蟻効力試験方法及び性能基準（Ⅰ）」の規定する室内試験は、有機リン系薬剤等の忌避性/即効性を備えた薬剤の評価方法としてはきわめて有効な方法でした。しかしながら、有機リン系薬剤の使用禁止を受けて防蟻薬剤は多様化し、その後、非忌避性/遅効性タイプの薬剤に推移してきたことに対応して、1999年に性能基準の一部改正（穿孔度2—2 cmの穿孔一のものがあったも、1週間以内に供試シロアリが全数死滅した場合は、その土壌処理用防蟻剤は防蟻性能ありとする、を追加）が行われ、現行の「土壌処理用防蟻剤等の性能基準及びその試験方法—(社)日本木材保存協会規格JWPAS-TS-(1) (2011)」に至っています。

今回の改正は、土壌処理用防蟻剤がより一層、非忌避性/遅効性薬剤に移りつつある状況の中で、現行の試験方法では性能基準の穿孔度を越えて「防蟻性能なし」とされるが、職蟻は木材を食害できなくなるなど、今の性能基準及び試験方法では的確に評価することが困難になっていることを受け、日本木材保存剤工業会（工業会と略）からの要望により実施したものです。

しかし、現行の規定と別個の試験方法を制定することは、認定に際して二通りの評価基準が存在

することで混乱を生じさせる恐れがあります。そこで、現行の野外試験はそのままとし、室内試験についてのみ、従来タイプの薬剤（既認定薬剤）と非忌避性/遅効性薬剤の両者を的確に評価できる性能基準と試験方法に変更することを目的にしました。

なお、今回の改正は液状の薬剤が対象であり、粉状や粒状の薬剤、薬剤が添加されたシート等の防蟻材料は従来通りとしました。

2. 經緯

工業会からの要望を受けて、日本木材保存協会（保存協会と略）、日本しろあり対策協会（白対協と略）の関係者が集まって協議し、その後、数回にわたって関連企業からも直接的に聞き取りを実施した結果、土壌処理防蟻薬剤の効力評価が両協会の認定業務に関わっていることを踏まえ、木材保存剤等審査事務局（審査事務局と略）が改正原案の策定を担当することになりました。

これを受けて、審査事務局では2016年7月に開催した臨時企画運営委員会で「非忌避性/遅効性防蟻剤の性能評価及び試験方法検討委員会（検討委員会と略）」を設置し、委員長：今村祐嗣／保存協会会長、副委員長：土居修一／白対協会長、委員：飯島倫明／保存協会認定委員長、金城一彦／白対協認定委員長、吉村剛／京都大学、板倉修司／

近畿大学、竹松葉子／山口大学、大村和香子／森林総合研究所、協力委員：服部徹／工業会、で発足させることを決定致しました。

検討委員会では、防蟻薬剤の性能試験を専門的に実施している機関の担当者と構成されたWG（委員長：吉村、委員：板倉、竹松、大村）に、既認定薬剤と非忌避性/遅効性の両方の薬剤についての的確に評価できる試験方法の作成を依頼し、2017年11月に改正原案の提出を受けました。それを踏まえ、2017年12月5日開催の検討委員会で基本的な内容について了解し、2018年2月14日に開催した企画運営委員会における議決を経て、両認定協会に試験法改正を依頼しました。

保存協会においては、それを受けて関連委員会ならびに理事会の議を経て2018年7月1日に改正試験法として決定しました。

3. 現行試験法の特徴

土壌処理用防蟻剤の効力は、現行法の基本となる試験法が制定された1989年までは野外試験だけで判断されてきました（直径15cmで深さ30cmの土壌を掘り上げて薬剤と混合して埋め戻す方法）。クロルデンの使用禁止を受けて各種の有機リン系薬剤が登場してきたことがきっかけとなり、米国の方法（43cm四方の土壌表面を処理し中央に置いた木片へのシロアリの攻撃を観察するグラウンドボード法、ならびに土壌表面をシートで被覆しコンクリートスラブで覆った改良法）を参考にしながらも、日本の床下環境を考慮した箱型容器（あるいは植木鉢）による野外試験方法と、ガラス管に処理土壌を詰めてシロアリの穿孔の様子を見る室内試験方法が決められました。

特に海外では見られない室内試験については、短期間で薬剤の効力の有無を判断するスクリーニング試験として提案されました。これは、当初の規格の解説（木材保存、14巻、29-35、1988）に以下のように示されています。「このように室内試験は野外試験との関連を考慮して策定されたものであるが、これがすなわち野外試験による評価を代替するものではない。あくまで、野外試験ではできない短期間での防蟻効力の評価を室内試験により行うものであり、薬剤のスクリーニングに重点を置いた試験として取り扱う必要があろう。」

さて、その室内試験に用いる土壌の性状やそれに混合する薬剤の割合、耐候操作の方法、野外試験と室内試験との相関性、箱型容器の材質等々についての根拠や内容は、上記の試験法解説に詳しく述べられています。

このうちガラス管に詰める土壌への薬剤の混合割合は、所定濃度の薬剤を1m²当たり5ℓ散布するとし、薬剤が土壌表面から1cm以内に留まっていると仮定して比重2の土壌重量に対する薬剤量を計算して、乾燥土壌12gに薬剤3g（4：1）ということで設定されました。野外試験の期間についても薬剤効力の保証期間に比して2年間は短いという意見もありましたが、いたずらに長くすることは薬剤の実用化の障害になるのではということで現状のようになりました。また、耐候操作についても、床下環境は夏期の高温期には40℃程に達するだろうという仮定の下に決められたと記録されています。

以来1999年の改正を経て、土壌処理用防蟻剤は、長期にわたってこの試験方法によって評価されてきました。今回の試験法の改正にあたっては現行の室内試験方法の基本的なところ（容器の形状や大きさ、薬剤の混合割合、試験期間等）を踏襲しながら工夫を加え、評価基準も多様な薬剤に対応できるようにしました。

4. 改正の要点

まず、今回の改正の中で変更のない主要な点は以下の通りです。

- ・ 野外試験方法
- ・ 室内試験で使用するガラス容器
- ・ 無処理土壌、処理土壌の調製方法（土壌の種類、水分状態、処理土壌への薬剤の添加率）
- ・ 耐候操作の方法
- ・ シロアリの種類と投入する頭数
- ・ 試験期間

一方、変更した主要な点は以下の通りです。

- ・ ガラス管の中央透明部（50mm長）に、20mm（処理土壌層）+30mm（無処理土壌層）の厚さで、耐候操作した処理土壌及び無処理土壌を詰めて、50mmの処理試験区とする。
- ・ 試験容器のガラス円筒の両方に無処理乾燥土壌50gと水10gを入れ、ガラス管の処理土壌

側にスギ辺材木片を置き、無処理土壌側のガラス円筒にシロアリを放虫する。

- ・性能基準として「処理試験区を未貫通の場合（穿孔距離が50mm未満の場合）」、または「処理試験区を貫通した場合は21日以内に全頭死滅ならびにスギ辺材試験体の質量減少率が1%以下」の場合に効果ありとする。

まず、現行の試験方法では処理土壌層50mmのうち20mmを貫通しないことが前提となっていたことを踏まえ、今回の新試験法では50mmの土壌層の構成を20mmの処理土壌層と30mmの無処理土壌層とし、まず「50mmの処理試験区を貫通しない」ことを性能基準の一つとしました。従来のタイプの薬剤はこれを満足するのが原則となります。

ついで、「50mmの処理試験区を貫通した場合は21日以内に死虫率100%ならびにスギ辺材試験体の質量減少率が1%以下」をもう一つの性能基準にしました。これによって非忌避性/遅効性薬剤の性能が判断できることになります。ただ、場合によっては5の繰り返しの中で上記性能基準の両者が混在する場合もあり得ると考えられます。この場合は、それぞれの繰り返しにおいて、どちらかの性能基準に合致すれば効果ありと判断します。

なお、試験方法の土壌に関する用語の定義は下記の通りです。

- ・無処理乾燥土壌：砂壤土を20メッシュでふるい分けしたものを、温度 $60 \pm 2^{\circ}\text{C}$ で恒量になるまで乾燥したもの。
- ・無処理土壌：無処理乾燥土壌4部に水1部（質量比）を加え、混合したもの。
- ・処理土壌：無処理乾燥土壌4部に試料1部を加え、十分に混合した後3週間室内に放置したもの。
- ・試験用処理土壌：耐候操作を行った処理土壌に、処理土壌の調製に用いた試料と同量の水を加えた後十分に混合したもの。
- ・処理試験区：ガラス管の中央透明部（50mm長）に、20mm（処理土壌層）+30mm（無処理土壌層）の厚さで、耐候操作した処理土壌及び無処理土壌を詰めたもの。
- ・無処理試験区：ガラス管の中央透明部（50mm

長）に無処理土壌を50mmの厚さで詰めたもの。

- ・処理土壌区：野外試験において処理した土壌の試験区
- ・無処理土壌区：野外試験において薬剤を処理していない土壌の試験区

5. 論点

ガラス管に詰める処理土壌の薬剤の混合割合は当初の試験法で設定された割合（乾燥土壌12gに薬剤3g）を引き継ぎ、乾燥無処理土壌4部に薬剤1部（質量比）となっています。現行規格に示されている12gという乾燥土壌の量は、「ガラス管の中央5cmの容量が 8.8cm^3 で、これに土を詰めると比重が1.3~1.4になる」ことから計算されたものです。

一方、実験現場においては5本あるいは予備も含めてそれ以上の本数に該当する量を一度に処理することが通常であり、そのような実態に即して改正試験法では割合での表記になりました。しかしながら、ガラス管への土壌の詰め方によってはシロアリの穿孔行動に影響が出る恐れがあり、1本あたりの乾燥土壌の重さ12gを目安としておく必要があります。

改正案を検討する保存協会の委員会において、無処理土壌に混合する薬剤の割合の妥当性について意見がありましたが、今回の改正は現行試験法の骨子を前提とするという方針からそのままとしました。

また、現行の試験方法では、ガラス管に連結するガラス円筒の一方には含水率を約25%に調整した無処理土壌を入れるとなっています。しかし、土壌含水率の計算方法は木材の場合とは異なっていることから誤解を避けるため、改正試験法では、その両方に無処理乾燥土壌50gずつを入れ、それぞれに水10gを加えるとなりました。これはシロアリの活動を考慮した水分状態ですが、もちろん当初の規格の解説に述べられているように土壌表面が管口まで到達していることが大切です。

今回の改正試験法では、性能基準の一つが、処理試験区を貫通した場合には21日以内に死虫率100%ならびにスギ辺材試験体の質量減少率が1%以下の場合、となっています。JIS K 1571に規

定されている木材保存剤の防蟻試験等では、処理試験体の質量減少率（食害率）の基準値が3%以下になっているため、WGにおいてこの値に揃えるのか論議がありました。結果的には、土壌処理用防蟻剤の効力評価という観点からシロアリの行動状況に重点が置かれていることを考慮し、特に食害程度を厳密に判断するという意図から1%以下になりました。なお、この「質量減少率が1%以下」の意味は、表1に記載された質量減少率の小数点1位を四捨五入して1以下という意味であり、具体的には試験結果の1.4までを効果ありと判断します。

ところで、木材保存剤の防蟻試験等に記載されている“死虫率”の算出に当たって、職蟻だけを対象とするのか、兵蟻も加えるのか示されていま

せん。そこで、今回は職蟻死虫率に統一し、結果の表の脚注に明示しました。今回、職蟻死虫率に統一した理由は次になります。

薬剤によって職蟻、兵蟻の死に方は異なります。例えば、忌避性の強い薬剤の場合、職蟻が餌を食べることができないため兵蟻に餌が供給されず、兵蟻が先に死にます。食毒剤あるいは脱皮阻害剤の場合は先に職蟻に影響が出ますが、その後に兵蟻が残ったとしても食害は生じません。以上のことから、兵蟻の死亡率は薬剤の直接的な効力を示すものとは言えず、あくまでも集団の活性を維持するために兵蟻を入れているということであり、死虫率からは除外すべきであると判断しました。

（今村祐嗣）

虫 め が ね

数年前から近くのカルチャーセンターの川柳教室に通っている。そのことを友人に話すと、俳句と川柳はどう違うのですかと質問がくる。俳句は自然を題材に詠む、いわば「風景画」です。季語もあれば切字もある。川柳は五・七・五で詠むのは同じですが、季語はなく自分という人間を素材に詠む、いわば「人物画（自画像）」ですと説明する。すると次に、あなたの代表作を紹介してくださいと言われる。この場合、その友人は「あはは」と笑う川柳を期待していることが多い。いわゆる、ユーモア川柳である。新聞などに出てくる川柳にはそういうものが多いせいであろう。わたしが学んでいるのは「現代川柳」と呼ばれ、ユーモア性は少ない。それで、友人に代表作を紹介しても、期待に添えないことが多い。日本では俳句人口が多く、川柳は少数派である。わたしが通っているカルチャーセンターでも、俳句の教室が五つもあるが、川柳教室は一つだけで、受講者も少数人数である。また、新聞の文芸欄を見てもほとんどの新聞が俳句を取り上げているが、川柳は少なく、ほとんど取り上げない新聞もある。

では、何故、わたしが俳句をやらずに川柳を学ぶ気になったかというところ、風景画の俳句よりも、人間の生き方や心象を詠む川柳のほうが、人間味があって、興味があつたからである。最近では俳句ブームと言われている。その火付け役は、TBS系列テレビの「プレバト!!」というバラエティ番組である。毎週いろいろな芸能人たちが作った俳句を講師の夏井いつき先生が「才能アリ」「凡人」「才能ナシ」の三段階にランク分けする。出演の芸能人との歯に衣着せぬ辛口のやり取りや、芸能人の俳句を的確に解釈し、そして添削して見違えるような作品に仕立て直す、その鮮やかさに、俳句のファンでなくても面白くて、視聴率が高い人気番組となっている。わたしは、川柳をやっているが、いろいろと共通点も多く、勉強にもなるので、毎週見ている。無くても分かる言葉をぎりぎりで削って、五・七・五に仕立てる。句の内容には誰でもが考え付くようなものはダメで、「オリジナリティ」が大切である。また、その句を読むことによって中身が映像として浮かび上がるのが大切であるなど、夏井講師が言われることは、川柳にも通じるのである。

わたしのこのエッセー「虫めがね」を読んでおられる方は、すでに気づかれた方もあると思うが、本誌の四十一巻四号から、恥ずかしながら、わたしの川柳を最後尾に付け加えることにしている。

♪進化したサルに苦労も心配も
（赤タイ）

川柳と俳句

ある。

最近では俳句ブームと言われている。その火付け役は、TBS系列テレビの「プレバト!!」というバラエティ番組である。毎週いろいろな芸能人たちが作った俳句を講師の夏井いつき先生が「才能アリ」「凡人」「才能ナシ」の三段階にランク分けする。出演の芸能人との歯に衣着せぬ辛口のやり取りや、芸能人の俳句を的確に解釈し、そして添削して見違えるような作品に仕立て直す、その鮮やかさに、俳句のファンでなくても面白くて、視聴率が高い人気番組となっている。わたしは、川柳をやっているが、いろいろと共通点も多く、勉強にもなるので、毎週見ている。無くても分かる言葉をぎりぎりで削って、五・七・五に仕立てる。句の内容には誰でもが考え付くようなものはダメで、「オリジナリティ」が大切である。また、その句を読むことによって中身が映像として浮かび上がるのが大切であるなど、夏井講師が言われることは、川柳にも通じるのである。